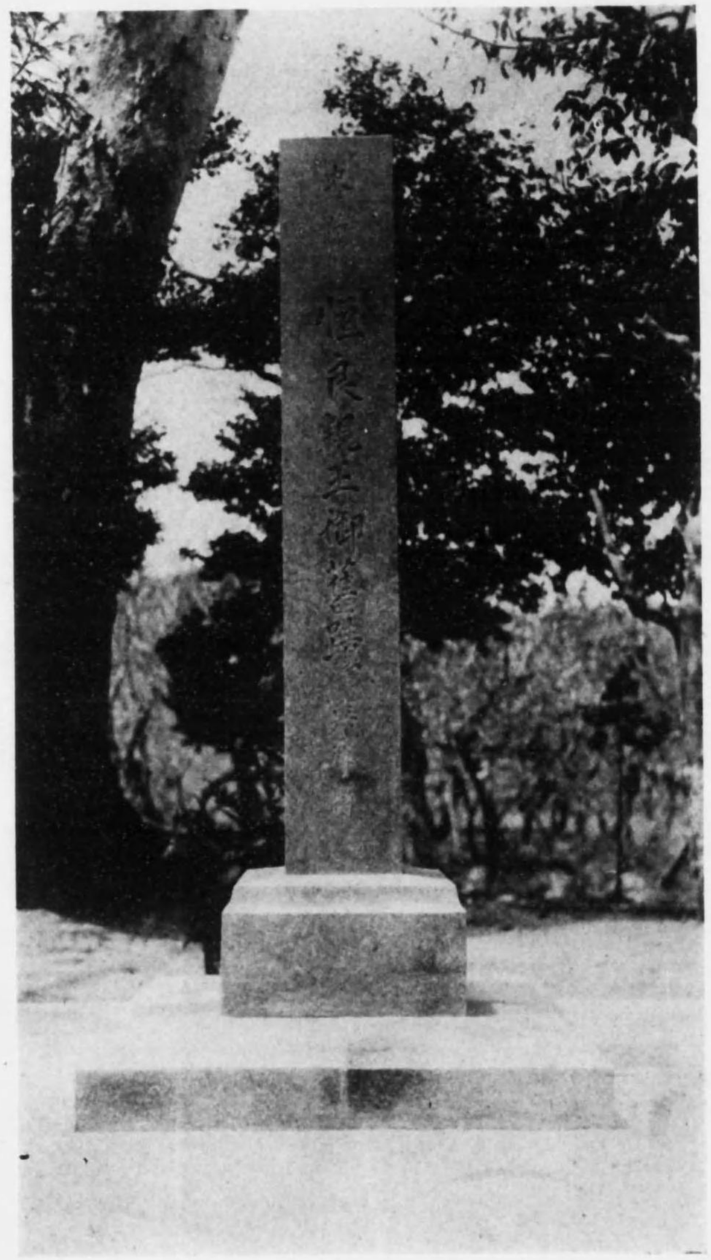
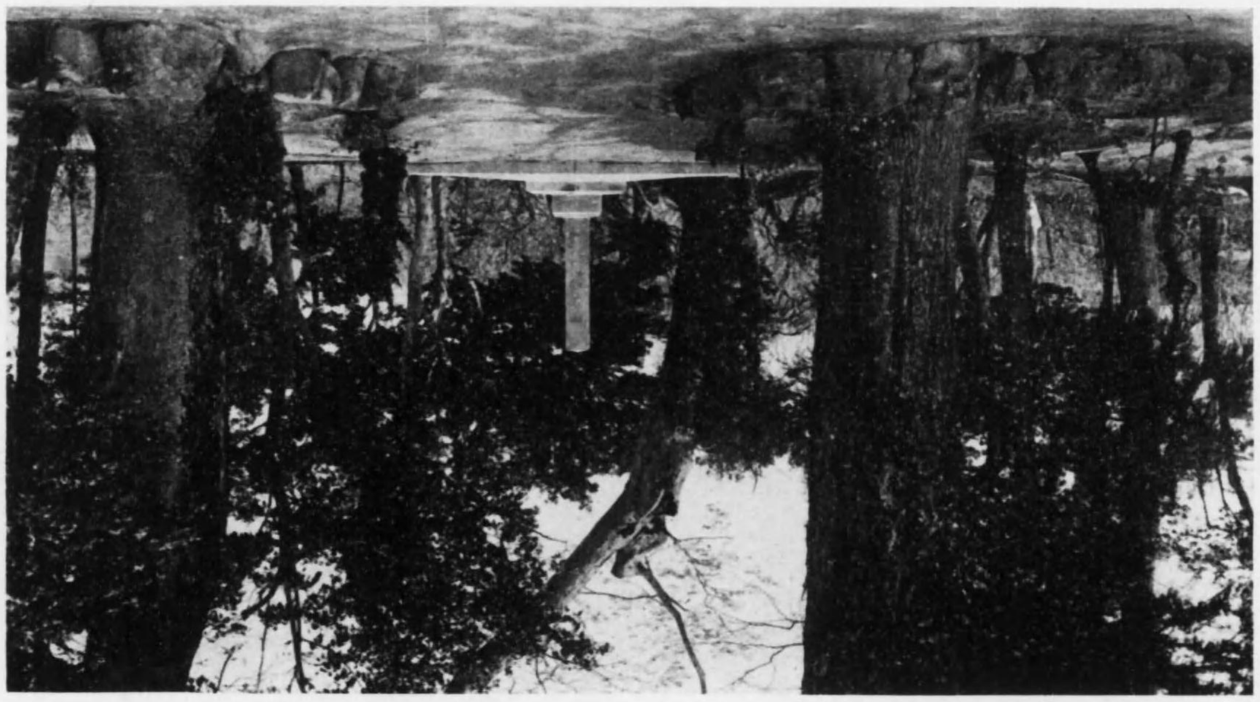
特240
332

恒良親王御事蹟

始

特 240
332





はしがき

長くも恒良親王の御舊蹟が、我村内に存することを、村内に生れ村内に住む人々にも、往々にして知られてゐなかつた。洵に恐懼に堪へない所である。併し一部の人々の間には、之れが顯彰に就き、寄り〳〵志を談りあつてゐた。その機漸く熟して、昭和十三年八月、縣の囑託・武藤誠氏、京都帝大講師・魚澄惣五郎先生その他の來村を請ひ、實地を踏査した。

その後皇紀二千六百の慶びの年に當り、記念事業として大いに進捗を見、終に縣の指令を稟けるに至つた。且つ碑文は陸軍大佐内藤稠彦殿の斡旋により、恒良親王の御弟宮、征西將軍懷良親王と極めて緣由深き、陸軍中將男爵菊池武夫閣下の揮毫を得て、

今春愈々崇嚴なる顯彰碑を建てるに至つた。恰も暗雲一時に披きて、陽光の璨々たるを仰ぐ如きを覺え、欣びの餘り熱涙に襟を沾ほはしめた次第である。

尙又此の冊子は、一面文字による建碑であり、曠古の超非常時局下、此の擧を透し、尊皇の大義を心肝に徹して、臣道實踐に幾分でも寄與する所が有るならば、啻に一里一村の喜びのみではないであらう。

此事業に當り、多くの人々の御教示と御後援を得た事に深く感謝の意を表するものである。

右記して、聊か「はしがき」とする。

昭和十六年九月

資母村長
資母村教育會長　澁谷喜兵衛

恒良親王御事蹟

資母村教育會謹纂

一

我大日本帝國は　天皇御親ら政治を御執りなされるのが建て前であることは今更いふまでもない。然るに、源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから政權は武士の手に移つた。頼朝、頼家、實朝等は朝廷を尊崇し恭順を失はなかつたが、北條氏は幼主を迎へて、陪臣でありながら專横をふるまひ、果ては古今に例のない無道な行をさへ敢てしたのである。

恒良親王樣が御生れになつた頃、京都には御父　後醍醐天皇が御位にお卽きになつ

てゐた。　天皇は御生れつき御聰明であらせられ、學問を御奬勵になり、賢臣學者を御召しになり、政治に深く御心をお用ひになつた。

一方、幕府では北條高時が執權となつてゐたが、性質がおろかで遊宴にふけり政治に力を入れなかつた。

そこで　天皇は一日も早く政治を朝廷にかへさせて、國民を安んぜしめようとの御心から、ひそかに武士どもをお召しになつた。ところが此事がいつの間にか鎌倉に聞えて、高時は大いに驚き、急いで兵を京都に攻め上らせた。　天皇は笠置に行幸せられて、兵をお召しになつたが、笠置は遂に陷り、一旦六波羅に御入りになつた。北條氏は白河の館に押込め奉つたのである。

二

此時、親王様は御年八歳で中納言藤原宣明の邸に預けられ給ふたのであつた。そして夜も晝も御父　天皇をお慕ひになり、お痛はしいことであつた。親王様は宣明に、

「御父上は何所に在すぞ。」

と、御尋ねになつた。宣明は、

「白河に御座なされ候。」

とお答へ申上ると、

「白河ならば都に近き所なり。など吾をつれ行かざる。」

と仰せられた。

宣明は、はつと恐れ入り、御心の中を察して涙をはら〳〵と落した。そして、

「都に近き所ならば、宣明何處にても御供仕るべきも、白河とは都より數百里をへ

だて申候。されば能因法師が、

都をば霞とともに出しかど秋風ぞ吹く白河の關

と詠みし歌もあり、道には人を通さぬ關も御座候。」

と申上げた。親王様は御涙を押へ、

「今、卿の答へしは奥州の白河なり。津守夏國の歌に、

あづまぢの關まで行かぬ白河も日數經ぬれば秋風ぞ吹く

と詠める白河は都より遠からず、名は同じなれど地は別なり。吾をあざむくや。」

と仰せられ、それからは復、御口に出してはその事を御問ひなさらず、御心の中にばかり御父上をお慕ひ遊ばされた。そして或日の夕方、鐘の音を御聞きになり、

つくづくと思ひくらして入相の鐘を聞くにも君ぞ戀しき

と御詠みになつた。大人も及ばぬ此のお歌の御心に、その頃京都中の男も女も、傳へ聞くほどのものは皆紙にしるし、扇に書いて、「これこそ八歳の宮様の御歌なり」と、泣かぬものはなかつた。

三

北條氏はおそれおほくも御父　天皇を隱岐の島へ、親王様を但馬の國にお遷し申上げた。その時、但馬守護職太田判官守延は、親王様を中畑山、日出神社の近所にお守り申上げた。時に元弘二年三月であつた。

資母村に住むものが、平生心なく此の山、彼の森、水の音、風の聲を、見たり、聞いたりしてゐるが、皆その昔、幼い親王様の御目にとまり、御耳に入り、そして御心を動かしたものであることを思へば、まことに恐れ多き事である。御粗末な御殿に御

くらしになつて、いつも監視せられ給ひ、御父上・御母上は素より、都を戀しく思ひこがれ給ひし御有様を考へるだけでも悲しいことである。春ならば咲く花、鳴く小鳥、秋ならば澄む月、招く芒に、親王様の御心持はどんなであつたらう。

斯うして次の年、元弘三年の春夏の交迄資母村は親王様の御住居の地となつてゐた。その頃御兄上の護良親王様は幾度となく危い場をお通りになりながら北條氏追討の御志は堅く、吉野に居まして諸國の官軍をお召しになり、楠木正成は千早の小城や金剛山のけはしい砦によつて鎌倉の大軍をなやましてゐたので、四方の義兵はやうやく盛になつた。隱岐の島におうつりになつてゐた御父　天皇は此の有様をお聞きになつてそつと島をお出ましになり、伯耆に渡つて、名和長年をお召しになつた。長年は急いで行宮を船上山に造つて　天皇を御迎へ申し、兵を集めて御守り申上げた。

天皇は諸國の將士に勅して六波羅を攻めさせられたのであつた。

四

この時、太田判官守延は、その一族、名和長年と心を一にし、恒良親王様を戴いて勤王の軍に加はつたのであつた。卽ち、六條忠顯が伯耆から京都へ向ふ山陰・山陽の大軍に丹波の篠村で出合ふたのである。六條忠顯は大そう喜び、錦の御旗を立て、親王様を上將軍と仰ぎまつつた。親王様の御心はどんなであつたらう。篠村を御出發になつた時には、お供に從ふもの幾萬と言はれた。忠顯は京都に攻めよせたが、不幸此の日は官軍に利あらず、太田判官は討死し、親王様は山城男山に落ちさせられた。

併し間もなく足利高氏は、赤松則村等とともに再び京都を攻めて、六波羅は落されたのである。　後醍醐天皇は伯耆をお出ましになり、兵庫にお着きになつた時、新田

義貞の使が來て、鎌倉を平げた事を　天皇に申上げ、正成も御出迎へ申上げて京都に御還幸になり、幾年ぶりに御父子御對面遊ばされたのであつた。そして親王様は翌年建武元年の一月皇太子にお立ちになつた。

五

皇太子恒良親王様が、京都の御所で靜かに安らかにおくらしになる間は、まことに短いものであつた。それは延元元年足利尊氏がそむいた爲である。

御父　天皇は、新田義貞を叡山の御座所にお召になり、皇太子様を奉じて北國におもむき、勢をもりかへして京都を回復するやうに仰せつけになつた。義貞はこのあつい御信任に感激の涙を流し、一族のものと一緒に、皇太子様や他の宮様をいただいて北國へ向つた。御父　天皇は叡山から京都に還幸あらせられ、皇太子様は北に向かはれた。これが御父子永遠のお別れであるとは知り給ふすべもなく、官軍の人々の悲壯な顔に北風が吹いてゐた。

さて義貞は七千餘騎をひきゐてお供つかまつり、北國へと向つたのであつたが、斯波高經が賊兵をつれて道をふさぎ、加ふるに嚴しい寒氣と烈しい吹雪になやまされて、行軍の苦しみは非常なものであつた。ある一隊の如きは主從三百人一人殘らず討死したものさへあつた。それでも義貞はやうやく金ケ崎の城に着くことは出來たが、賊兵は十重二十重に城をかこみ、夜となく晝となく攻めた。官軍は小勢にもかゝはらず心を一つにしてよく防ぎ、なか〳〵落ちなかつた。併し翌年の春、杣山城からの後援の官軍が負けて退き、城内の食物がなくなつて、あはれ攻め落されてしまつた。御兄宮尊良親王様は御自害あらせられ、皇太子様は氣比の太宮司太郎と言ふ人が小舟に乘せ

て敵の目をくらまし、ある小村におかくし申上げたが、きびしく賊兵がさがして遂に捕はれの身とならせられた。

一方城内の討死した官軍を全部しらべても、義貞兄弟の死骸が見つからなかつたので、賊の大將は皇太子様の御前に參り、

「義貞・義助二人の死骸見え候はぬは何となり候らひけるやらん。」

と、御訊ね申上げた。皇太子様は御心の中に、もし眞實のことを言へば官軍の不利となるであらうと思はれて、

「昨日の夕ぐれ自害したりしを火葬にせしならん。」

と仰せられたので賊將は安心した。實は義貞・義助等は早くも杣山城にかくれ、遠いはかりごとを運らしてゐたのであつた。

斯くて皇太子様は賊軍に護られて京都へお還りになつたが、なつかしい都も元の都ではなかつた。御父上も御母上も、吉野の山深きあたりに行幸啓なされ、都には尊氏の家臣ばかりがゐた。そして皇太子様と成良親王様の御二人はいたはしくも牢の御所に居らせられることとなつた。

六

又、其の次の年の春も終りの頃、尊氏兄弟が何か相談をして、家臣粟飯原氏光を牢の御所へさし上げて、

「かゝるうつとうしき所に打ちこもりて御座候へば御病氣のもよほすことも候はんかと存じお藥を進め申候。」

と、申し上げしめた。それには次のやうなわけとたくらみがあつた。

去年金ヶ崎城が落ちる前、義貞・義助は杣山城に入つたのを、賊軍には自害したと仰せられたので、賊軍は安心してゐる間に義貞等は勢をもりかへしてあちこちの城を取つたので、足利兄弟は大いに驚き、皇太子様と成良親王様とを毒害し奉らうと考へたのである。

「未だ病の見えざるに藥をさし出すほど吾等を思ふならば、などか此の一室に押しこめて朝夕物を思はすべしや。これは定めて藥にあらで毒なるべし。」

と、成良親王様が庭に捨てようとなさるのを皇太子様はお止め遊ばして、

「そも〳〵尊氏・直義は情なき者なれば、たとひ此の毒は飲まずとも、のがるべき生命にあらず。吾等は籠の鳥の雲を戀ひ、水なき魚の水を求むる如く、聞くにつけ、見るにつけて悲の中に待つこともなき月日を送りて人をうらまんより、命を毒にちぢめて未來の世に往かんにはしかず。」

と仰せられ、それからは毎日御經を讀み、佛様を念じて、毒をお召し上りになつた。その爲に皇太子恒良親王様は御心地かわり、延元三年の四月青葉に啼くほととぎすにさそはれて、御年十五歳を一期にいともしづかにおかくれ遊ばされたのは、悲しいとも、お痛はしいとも申上げやうはなかつた。成良親王様も少しおくれて御かくれ遊ばされた。

我等が國史を讀んで、かうした場面に出合ふ毎に、本を伏せて太息を吐かずにはゐられない。尊い御方が悲しい、痛ましい御生涯を終へさせられると言ふことは、多くは國體がはつきり理解せられないから起つた事である。我等は奉安殿を仰ぐ時、神社に參拜する時、又、恒良親王様の御舊蹟を過ぎる時、深く心に期するところがなくて

はならぬ。

敦賀市の官幣中社金ヶ崎宮には、尊良親王様、恒良親王様の御二方をお祀りして、永く御靈を御鎮め申上げてゐる。

（をはり）

後記

此小冊子は、國民學校初等科五六年生に、讀めることを主なる目標としたものであり、史實に至つては、別に研究を挨つものが山程も存するであらう。只概略を記したものである。又村内に於ける實地について、興味を寄せられる人士は、一度杖を曳かれて、親王の御舊蹟、太田氏の館、城の跡等を踏査せられんことを慫慂するものである。そして、その上御教示を賜はらば、幸甚之に過ぐるものはない。

筆者しるす

417
451

昭和十六年十月 十日 印刷
昭和十六年十月廿五日發行
（非賣品）

編纂兼發行者 兵庫縣出石郡資母村役場 代表者 澁谷喜兵衛

印刷者 石川縣金澤市淺野町 淺田一次

發行所 兵庫縣出石郡資母村 資母村教育會

終